ご　挨　拶　（ 於：第25回「赤彦忌」2012-3-27 ）

東京若杉会々長　橋本　清（新制９期）

私共秋田県立角館高校学校同窓会「若杉会」と申しますが　本日当式典に大勢出席の栄を賜っております。同窓会長、諸先輩出席のところ誠に僭越と存じますが　ご指名頂きましたので私から一言お祝いのお言葉を述べさせて頂きます。本日ここに第 25 回赤彦忌が開催の運びとなりましたこと心からお祝い申し上げます。

ご存知の方も多いと思いますが　私共母校の校歌は　この学校設立にも大きく貢献されました我がふるさと角館の大先達でもあります日本画家の平福百穂先生が　ｱﾗﾗｷﾞ派の同人としての誼で　島木赤彦先生にお願いしたのでありまして　ご本人は校歌の詩想を得るべく大正 14 年紅葉の時季に病をおして角館を訪れ作詞されたものであります。この旅は健康上随分無理であり　帰られてからも暫く無為の状態だったと聞いております。病床に伏しながら１番２番はこんな風だよと低い声で吟じられ　後の２節は「子供の元気を奮い起こすようなものを」と云われてたとも聞いております。角館の旅行から半年も経たずして翌年の今日　校歌も未完ながら永遠に還らぬ人となったのです。その後やはり同人でありました斉藤茂吉先生等が補詞され　私共は他には例のないアララギ派総結集による校歌を常に誇りにもちながら心の糧として唄い続けてるのであります。私も角館を出てから半世紀以上になりますが　当時こういう経緯は卒業生在校生は勿論　その家族　隣のおじいゃん　おばあちゃん　子供まで角館に住む者誰でも知っていることでして「あの百穂さんが　お友達で有名な島木赤彦さんという人にに頼んでつくてもらった校歌だとよ」と言っては小松耕助さん作曲のよき旋律と相俟って　みんなで事あるごとにこの校歌を唄ってたことを記憶しております。

本日東京からも大勢参加しておりますが　北日本の脊梁ので始まる１番　2 番の詞は特にふるさとを離れ遠くに住むものにとっては一層心に響く自然観であり　最後には朔雪凌ぐ若杉のごとくと　遠く離れてもこの校歌に励まされ　頑張ってきたこと　そして今元気に生きてることを正に実感するのであります。

常日頃この素晴らしい校歌を一刻も早く全国に発信したい　21 世紀枠でも　希望枠でもいいから早く甲子園に出てきて欲しい　そして甲子園の空高く放歌しﾒﾃﾞｨｱを通し全国に発信したいとみんなそんな強い想いを持っておりました。

然るに昨年６月東京の総会で学校から送ってきた資料の中に３月 28 日の信濃毎日のｺﾋﾟｰが入っており「赤彦忌」で校歌が合唱されたことを知り　角館の方では知る人ぞ知るということだったようですが　東京の我々にはﾞﾋﾞｯｸﾞﾞﾆｭｰｽでありまして　え　こんなこともあるの？と。　それじゃ我々も来年参加できな

いかなということになり今日に至った訳であります。
私も最初ｲﾝﾀｰﾈｯﾄで赤彦記念館の電話番号をしらべ直接お電話申し上げたところ生憎宮坂館長さんが留守でしてが　電話に出られた女性の方に主旨を説明したところ　それではと赤彦研究会の小口さんをとご紹介頂きお話できたのがことの始めでした。突然電話申し上げたり FAX を送らせて頂いたり大変失礼を致しました。直後には宮坂館長さんともお話しさせて頂き「是非に」とお返事を頂戴し　ほっとした気になり　その場で宿を紹介して頂いたり　全くの無礼を申し上げ今思うと全く恐縮の至りです。その後詳細の打合せは文学祭実行委員長の石川さんとここ数カ月ﾒｰﾙやら直接の電話で連絡取らさせて頂きました。今日石川さんに初めてご挨拶させて頂きましたが今日初めてという感じは全くありませんで同じ校歌を唄う同窓の仲間にお会いした気分でおります。　これがﾒﾙ友と言うんでしょうか？
この間本当に皆様方にこころ暖まる対応を頂き感謝・感激の極みです。改めて深くお礼申し上げる次第です。
本日　こうして私どもがお伺いしておりますことは　同窓の若杉健児でもあります秋田県の佐竹知事もよく存じておりますこと申し添えておきます。
粗辞ではありましたが　最後に　これを機会に下諏訪の皆様方とふるさと仙北市が「百穂と赤彦」の絆で一層ご交流が深まることを念願しご挨拶とさせて頂きます。有難うございました。